

# A C E REVIEW

the Activity Center for English

# 2021



英語教育センター  
(Activity Center for English)

**2021 Volume 3**

ISSN 2434-8406

## ACE COMMITTEE MEMBERS 2021

### センター長

小山 敏子 (教育学部)

Toshiko Koyama (Faculty of Education)

### 文学部

今井 澄子

(Faculty of Literature)

*Sumiko Imai*

### 教育学部

鈴木 幸平

ベー・シュウキー

(Faculty of Education)

*Kohei Suzuki*

*Siewkee Beh*

### 人間社会学部

ランカシャー・テレンス

池田 香代

(Faculty of Human & Social Sciences)

*Terence A. Lancashire*

*Kayo Ikeda*

### 薬学部

森本 正太郎

(Faculty of Pharmacy)

*Shotaro Morimoto*

### 英語教育センター

アラオ・アーノルド

荒川 亜希

有田 恵子

(Activity Center for English)

*Arnold F. Arao*

*Aki Arakawa*

*Keiko Arita*

# I. ACE — Past, Present, and Future

小山 敏子

2017年度に創設された英語教育センター（Activity Center for English: ACE）が、今年度で5年目の節目を迎えた。ACEの設立や運営に携わってきたACE運営委員の尽力とともに、英語担当教員をはじめとした教職員から得られた理解と協力のおかげで現在の体制が築かれてきたことは言を俟たない。そして、こうしたACEの活動の記録を目的とした『ACE Review』の発行も3回目になる。諸般の事情によりこれまで隔年発行となっていた「年次報告」であるが、2021年度からは文字通り年次発行とすることにした。

さて2018年度末に発行した創刊号にはACE設立の背景とセンターの主な業務内容を簡潔にまとめているが、一つの節目となる今号の巻頭では、ACEのこの5年間の歩みをふりかえりながら、今後の運営について考えていきたい。

## 1. 2014年度～2016年度

英語教育センター設立の構想は、2014年に尾山眞之助前学長のもとで開始された本学の英語教育改革案に端を発する。これまで大谷女子大学時代から本学の英語教育の中心的な役割を担ってきた文学部英米語学科の廃科が2012年度に決定したことを受け、本学の英語教育を推進できる全学的な組織の必要性を理事長に訴えられことにある。

表1. 検討委員会構成メンバー（所属は当時）

英語教育検討委員会		
2015/04/01		
委員長	小山 敏子	（人間社会学部）
委員	今井 澄子	（文学部）
	大倉 孝昭	（教育学部）
	森井 哲二	（教育学部）
	村尾 敏彦	（人間社会学部）
	岡島 克樹	（人間社会学部）
	森本 正太郎	（薬学部）
庶務	森 美和	（大学企画課）

そこで、まず本学にふさわしい英語教育のあり方を検討するため、2015年4月2日に、学長裁定による「英語教育検討委員会設置要項」が制定され、尾山前学長により各学部から委員が指名された（表1）。この委員会には、1) 共通教育としての英語教育のあり方、

2) 英語教育に関する全学的な組織のあり方、3) その他、本学の英語教育の改善に資すること、について検討することが課された。そこで本委員会では、まず各学部、学科からの意見を聴取することからはじめ、半年間に亘って英語教育カリキュラムや施設、設備のあり方などについて検討を重ねた。

その結果、委員会から 2015 年 10 月 18 日付けで、本学における英語教育の中核を担う組織として英語教育センター設置の必要性が明記された答申が提出された。これを受けて、理事会での承認がなされ、「大阪大谷大学英語教育センター (Activity Center for English: ACE)」の設立が決定されたのである。

翌年の 2016 年 4 月 1 日付けの「大阪大谷大学英語教育センター設置準備室 設置要項」(学長裁定) に則り、室長と 6 名の兼務教員が尾山前学長により指名された (表 2)。

表 2. 設置準備室構成メンバー (所属は当時)

英語教育センター設置準備室		
2016/04/01		
室長	小山 敏子	(教育学部)
兼務教員	今井 澄子	(文学部)
	地下 まゆみ	(教育学部)
	中村 雅司	(人間社会学部)
	村尾 敏彦	(人間社会学部)
	森本 正太郎	(薬学部)
事務	藤井 小百合・森 美和	

この準備室では様々な検討がなされ、センター設置に向けての準備が行われていった。まず、1) センター設置場所の検討、2) 英語活動が可能となるセミナー室の設置とそこに配備するタブレットや通信環境の整備、3) 学生が自由に英語学習教材を利用できる教室の整備、4) 空き時間に英語でのコミュニケーション活動を可能とする English Café の構想、などを行った。こうしたハード面の準備に加え、1) 英語カリキュラムの整備とともに、それに伴う習熟度クラスの設定、またそのための測定テストの導入を検討、2) e-Learning プログラム導入と英語カリキュラム連動に向けた検討、3) 入試作問方針の整備とマニュアル作成、4) センターの運営規程やセンターで雇用する Native English Speaker 特任講師雇用内規の立案と公募、5) センター開設についての学内外への広報、などソフト面での準備内容も多岐に亘った。そのための会議の開催数は一年間で実に 23 回に及んだ。

## 2. 2017 年度～2021 年度

2017 年 4 月 1 日に開設された英語教育センターで行われた事業の報告は、2017 年度～2018 年度は『ACE Review 2018』に、2019 年度～2020 年度は『ACE Review 2020』に、その活動内容が記載されているためここでは再掲しない。また、2021 年度の事業は本号で報告されている。そちらを参照されたい。

## 3. 2022 年度～

2021 年度に開設 5 年目を迎えた英語教育センターの今後の運営について、浅尾広良現学長から、現状への「意見」と今後の「検討課題」について伺った。

まず、本学の共通教育科目としての英語科目のあり方について、習熟度クラスの設定や一年間の英語力の向上度の測定など、現在 ACE で行っている事業の継続を強く希望された。一方で、e-Learning プログラムについては、英語科目との連携や ACE プログラムにより一定の実績をあげていることについて評価されつつも、その活用率のさらなる向上を課題とされた。次に、組織としてのあり方としては、Open Campus などを通じての学外への広報活動の充実を要望された。また、英語担当専任教員の補充やセンター開設時からの悲願であるセンターの専任職員への配置についても検討課題であるという認識を示された。加えて、昨年度から行っているキャリア開拓塾との連携など、学生への英語学修支援について今後も積極的に取り組んでほしい旨の要望があった。

次年度からはこうした要望や課題を念頭に、それぞれの事業の充実を図っていく予定である。このほか、ACE としては学生への学修支援はもとより、英語科目担当教員への情報発信や支援も積極的に行っていくことを考えている。

## II. 共通教育英語関連科目

小山 敏子

ACE では、2017 年度のセンター設立以来、本学の共通教育やキャリア科目に属する英語科目のカリキュラム改革や時間割策定などの教務関連の業務を、本学教務委員会と連携しながら担ってきた。

### 1. 共通教育科目「英語 IA/IB」「英語 IIA/IIB」


中でももっとも履修者が多い英語 IA/IB、英語 IIA/IIB では、文部科学省から出された指針や本学教務委員会の方針に則り、「評価方法」「フィードバックの方法」「評価基準」などの項目を統一した共通シラバスを設定している。また、これにともない、使用するテキストも英語レベルや内容に偏りが無いものを予め ACE で複数選定したテキストバンクとして用意し、各担当者がその中から選択する方式にしている。こうした一連の改革は、英語 IA/IB は 2017 年度から、英語 IIA/IIB については 2018 年度から全面的に実施した（表 1）。

表 1. シラバス共通項目（英語 IA/IB（コミュニケーション）と英語 IIA/IIB）

<p><b>&lt;評価方法&gt;</b> 複数回の復習テストにより確認された授業内容の理解度（50%） 平常点（毎回実施するクイズの正答率、課題提出状況とその内容、授業内での発表内容）（40%） e-Learning プログラムに設定された課題達成度（10%）</p>
<p><b>&lt;フィードバックの方法&gt;</b> 復習テストやクイズ実施時は、必ず解説などのフィードバックを行う。また、提出物は授業内で返却して説明する。授業中、及びふりかえりシート等に記載された質問については、次回の授業時に回答する。</p>
<p><b>&lt;評価基準&gt;</b> (1) 英文法の知識 ・可：テキスト内の文法に関連した練習問題を解くことができる。 ・秀：テキスト内の文法に関連した練習問題が正確に解答でき、その内容を説明できる。 (2) 英文読解の知識 ・可：テキスト内の英文の概要を把握できている。 ・秀：テキスト内の英文の内容を正確に理解し説明できる。 (3) 英語の聴解力 ・可：テキスト内の英文や日常会話の概要を聞き取ることができる。 ・秀：テキスト内の英文や日常会話を正確に聞き取り説明できる。 (4) 英語の発信力 ・可：テキストに使用されている語句や表現を使って、簡単な英文を作ることができる。 ・秀：テキストに使用されている語句や表現を使って、英語で自分の意見を発信できる。</p>

また、2019年度から「到達目標」「評価基準」の内容を、授業運営の実態に沿うように改めた。特に「評価基準」を「到達目標」に合わせ、英文法、英文読解、英語聴解力、英語発信力の4つの項目において、「単位認定に必要な最低限の基準」と「最も望ましい基準」を明確にしている。加えて、英語 IA/IB と英語 IIA/IIB を連続して履修する学生が大多数であるため、「授業テーマ」と「到達目標」については、両科目の連続性を重視したシラバス内容にしている（表2）。

表2. シラバスの連続性（英語 IA/IB から英語 IIA/IIB）

<b>英語IA/IB（コミュニケーション）</b>
<授業テーマ> 英語コミュニケーション能力の育成
<到達目標>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・コミュニケーションの基礎となる英文法が説明できる（Grammar）。</li> <li>・比較的容易な英語で書かれたテキストを正確に理解できる（Reading）。</li> <li>・英語での平易な日常会話を聞き取ることができる（Listening）。</li> <li>・基本的な語句や表現を使って英語で発信できる（Writing）。</li> </ul>

<b>英語IIA/IIB</b>
<授業テーマ> 英語コミュニケーション能力の発展
<到達目標>
英語IA・IBで培った基礎的コミュニケーション力をもとに、アカデミック、または専門分野に関する指定のトピックについてのまとまった英文を文法の知識（Grammar）をもとに正確に理解でき（Reading, Listening）、そこで学んだ語句や表現を使って英語で発信できること（Writing）を目標とする。

## 2. 習熟度別クラスと成績評価

本学では、2018年度から英語 IA/IB クラスで、また、2019年度からは英語 IIA/IIB クラスでも習熟度別クラス編成を導入している。英語の習熟度にもとづいてクラスを分けることで、学生は自身の英語力に応じた学習環境で学ぶことができる。同時に、教授側の教員の立場からは学力差の少ないクラスで効率的な授業運営を可能にすることになり、共通教育の英語科目では、全国の大学で採用されているシステムである。

クラス編成の根拠データは、入学時に実施するプレイスメントテストと、1回生の後期16週目に実施するアチーブメントテストを使用している。このテストの実施内容やスコアな

ど過年度分は『ACE Review』で報告してきた。また 2021 年度分については「英語習熟度測定テスト」の章を参考にされたい。

こうした習熟度別クラス（標準クラス、基礎クラス）の設定によりレベル別のクラスに配属されることで学生に対して成績評価で不利益が生じないように、それぞれのクラスの秀・優の割合を決め、それに沿って評価してもらえよう授業担当教員に依頼している。

### 3. 今後に向けて

2023 年度入学生から、教務委員会による本学の共通教育やキャリア科目のカリキュラム改革が行われることになっている。そこで、ACE がその業務を担当している英語科目についても、教務委員会と協議しながら改革を行っていくことになる。また、現在のシラバスについては、「評価方法」でさらに具体的な言語活動内容を明記するなどして、学生にとって授業内容と自身の学修成果がより具体的でわかりやすい表記を検討するとともに、年々新しい英語テキストが出版されていることを受け、テキストバンクの見直しも視野に入れる。

また、習熟度別クラスについては、導入後 4 年を経て、クラス分けの規準を再確認する必要があると感じている。その際には、成績評価基準の割合を見直すことも検討していく。このように ACE では、今後も学生の英語力向上を目指した取り組みを行っていきたい。



### III. 英語習熟度測定テスト

荒川 亜希・小山 敏子

英語習熟度を測るテストは2018年度から英語運用能力評価協会(ELPA)を利用してきた。現在、ほとんど大学ではこの種のテストをオンラインで受験させているが、本学では、学生全員が同じ環境で受験できるよう導入当時から対面での実施を続けてきた。

この習熟度テスト実施は、学生が「自身の英語力を知る」ことを最大の目的としているが、他大学同様、このテストのスコアを共通教育英語の習熟度別クラス編成に使用している。つまり、入学時に実施するテスト(プレースメントテスト)のデータは英語IA/IBのクラス分けに使用し、また、1回生終了時に実施するテスト(アチーブメントテスト)のスコアで英語IIA/IIBのクラス編成を行っている。

#### 1. 2021年度の実施状況

例年通り、入学式の翌日、2021年4月3日(土)にテストを実施した。準備に際しては教務課スタッフと各学科の共同研究室スタッフの協力の下、従来通りの手順で行った。また、教育活動については関連省庁から行動制限が求められていない時期ではあったものの、2020年度に引き続き、コロナウイルス感染拡大防止を考慮に入れて学生同士の「密」を避けるため、午前、午後に分けて、それぞれ2学部ずつ実施した。実施時は、座席の配置はもろんのこと、手指消毒や教室の換気の徹底などの感染対策にも努めた。

試験当日はACE運営委員が監督責任者を務め、各学科の教職員が監督補助ならびに配布回収補助に携わり、新入生587名のうち、569名(96.9%)が受験した(表1)。このテスト結果をもとに、英語IA/IBクラスの習熟度別クラス編成を行った。

また、アチーブメントテストも例年通り、後期16週目に対面で実施する方向で準備を進めていたが、年明けから新型コロナウイルスの変異株であるオミクロン株の大流行により、感染による療養、または自宅待機を余儀なくされる学生からの連絡が相次いだ。これまでは、入学直後に行い履修登録締め切りまでに余裕がないプレースメントテストとは異なり、アチーブメントテスト当日の欠席者への配慮として、本試験の1週間後に追試験日を設定、本試験当日に受験できなかった学生に対し、追試験を受験するよう周知してきた。そのため、追試験日も欠席した場合、新年度のクラス分けについての配慮などはしてこなかった。しかしながら、インフルエンザウイルスと異なる今回の感染症の特徴から、2022年1月26日(水)の本試験直前に、本試験も追試験も受験できない学生が複数いることが判明した。

そこで、コロナウイルス罹患、または濃厚接触者となり両方の試験を受験できなかった場合に限り、2回生で配属される共通教育英語IIA/IIBのクラスについては、英語IA/IBの学

修状況を加味するなどして対応し、不利益を被らないよう配慮を行うことにした。配慮の対象となる学生には、感染または濃厚接触判明時に学内のシステム（Microsoft Forms）に登録した上で、後日、教務課に「欠席届」を提出することとし、この連絡は本試験後の1月27日に学内ポータルで全学部1回生に配信した。このような対応策を講じた上で、追試験を2月3日（木）に実施した。受験者は追試験受験者も含めて、1回生578名中517名（89.4%）となった（表2）。

表1. 2021年度プレイスメントテストの受験状況

2021/04/03実施

学部・学科 在籍者数	受験者数 (名)	欠席者数 (名)	受験率 (%)
日本語日本文学科 54名	51	3	94.4%
歴史文化学科 58名	54	4	93.1%
教育学部 164名	160	4	97.6%
－幼児教育専攻 69名	67	2	97.1%
－学校教育専攻 73名	72	1	98.6%
－特別支援教育専攻 22名	21	1	95.5%
人間社会学科 81名	79	2	97.5%
スポーツ健康学科 107名	103	4	96.3%
薬学部 <sup>*</sup> 123名	122	1	99.2%
合計 587名	569	18	96.9%

※薬学部留年生除く

また、配慮を必要とする学生については、本学の学生課が入学予定者に対して「大学生活支援カード」を配布、そこに記載された情報をもとに、アクセスルームの学生支援コーディネーターが個々の学生の状況を確認し本人からの要望を聴取している。そこで、ACEでは、英語習熟度テスト実施前に学生支援コーディネーターと打ち合わせを行ってきた。その際に必要な情報を共有してもらうことで、座席の配慮や口達等の画面（紙面）提示、また別室受験などの対応を行っている。

特に聴覚障害を持つ学生への対応は、アクセスルームの学生支援コーディネーターと専門知識を持つ教育学部教員の補助を得て試験実施が可能となっている。2021年度も教育学科で3名、歴史文化学科で2名の学生に対し、適切な対応ができた。

表2. 2021年度アチーブメントテストの受験状況

2022/01/26本試験実施

2022/02/03追試験実施

学部・学科 在籍者数	受験者数 (名)	欠席者数 (名)	受験率 (%)
日文語日本文学科 54名	42	12	77.8%
歴史文化学科 56名	52	4	92.9%
教育学部 164名	151	13	92.1%
－幼児教育専攻 69名	63	6	91.3%
－学校教育専攻 73名	66	7	90.4%
－特別支援教育専攻 22名	22	0	100.0%
人間社会学科 79名	63	16	79.7%
スポーツ健康学科 105名	95	10	90.5%
薬学部* 120名	114	6	95.0%
合計 578名	517	61	89.4%

\*薬学部留年生除く

## 2. 2021年度の結果

表3・表4は2021年度の両テストの学科、専攻別の結果である。表中、英語 IA/英語 IBを共通教育の外国語科目として履修している学生を「英語履修者」として示している。スコアから明らかなように、英語履修者の平均点が、受験者全体よりも高い傾向にある。本学の場合、大部分の学生が、共通教育の外国語として英語を履修しているが、中学、高等学校時代から英語に対して苦手意識を持つ学生、または不得意な学生は、本学入学後は他言語を履

修し、英語に触れる機会が減少することが理由の一つと考えられる。

また入学時に実施したプレイズメントテストと1回生終了時に受験するアチーブメントテストの平均点のスコアは、本学新入生の英語力の一年間の推移を示している。2021年度について両テストのスコアを比較すると、アチーブメントテストの平均点が全体で2.8点、英語履修者で2.9点高かった。表中では母数となる受験対象者が同一ではないため、この数値から、2021年度入学生の英語力が入学時よりも向上した、と結論づけることはむづかしい。

しかしながら、2021年度も、2020年度に引き続きコロナ禍によるオンラインでの授業実施を余儀なくされた（前期10回、後期4回）。英語のようなコミュニケーション力を育成する語学科目の授業が対面で実施できなかったことは、受講する学生にとっても大きな不利益であり、同時に、授業実施者の教員にも多大な負担をかけることになった。そうした状況を考慮に入れると、今年度のアチーブメントテストのスコア向上は朗報といえるだろう。

表3. 2021年度プレイズメントテストの学科・専攻別結果

	受験者数 ( )内は欠席者数	英語 履修者数	平均点		最高点 (300点)	最低点	標準偏差	
			全体	英語 履修者			全体	英語 履修者
全体 587名	569名 (18名)	555名	145.7	146.5	261.0	58.0	32.6	32.9
文学部 112名	105名 (7名)	90名	142.2	145.6	253.0	58.0	31.9	33.2
- 日文 54名	51名 (3名)	41名	147.0	153.9	253.0	90.0	33.8	35.3
- 歴文 58名	54名 (4名)	49名	137.7	139.0	206.0	58.0	29.5	30.2
教育学部 164名	160名 (4名)	164名	152.1	152.1	234.0	88.0	28.7	28.7
- 幼教 69名	67名 (2名)	69名	145.6	145.6	234.0	88.0	30.5	30.5
- 学教 73名	72名 (1名)	73名	159.4	159.4	225.0	108.0	26.4	26.4
- 特支 22名	21名 (1名)	22名	147.9	147.9	210.0	104.0	25.1	25.1
人間社会学部 188名	182名 (6名)	180名	131.0	130.7	232.0	66.0	28.6	28.6
- 人社 81名	79名 (2名)	75名	136.1	135.9	232.0	87.0	33.0	33.2
- スポ 107名	103名 (4名)	105名	127.0	127.0	213.0	66.0	24.2	24.2
薬学部 121名※+2名※2	122名 (1名)	121名	162.4	162.5	261.0	67.0	33.8	33.9

※1 薬学部留年生除く

※2 入学前単位認定者

表 4. 2021 年度アチーブメントテストの学科・専攻別結果

2022/01/26本試験実施  
2022/02/03追試験実施

	受験者数 ( )内は欠席者数	英語 履修者数	平均点		最高点 (300点)	最低点	標準偏差	
			全体	英語 履修者			全体	英語 履修者
全体 578名	517名 (61名)	555名	148.5	149.4	267.0	49.0	32.2	32.2
文学部 110名	94名 (16名)	90名	143.5	147.4	250.0	49.0	32.8	32.9
- 日文 54名	42名 (12名)	41名	150.8	158.3	250.0	93.0	35.1	35.7
- 歴史 56名	52名 (4名)	49名	137.5	139.6	217.0	49.0	29.5	28.2
教育学部 164名	151名 (13名)	164名	158.1	158.1	239.0	95.0	25.7	25.7
- 幼教 69名	63名 (6名)	69名	151.5	151.5	239.0	95.0	26.0	26.0
- 学教 73名	66名 (7名)	73名	165.7	165.7	207.0	104.0	23.7	23.7
- 特支 22名	22名 (0名)	22名	154.0	154.0	215.0	123.0	24.2	24.2
人間社会学部 184名	158名 (26名)	180名	133.5	133.3	244.0	75.0	30.4	30.2
- 人社 79名	63名 (16名)	75名	139.1	140.5	244.0	75.0	34.9	35.8
- スポ 105名	95名 (10名)	105名	129.8	128.9	212.0	84.0	26.4	25.2
薬学部 118名 <sup>※1</sup> +2名 <sup>※2</sup>	114名 (6名)	121名	160.7	160.7	267.0	72.0	33.1	33.1

※1 薬学部留年生除く

※2 入学前単位認定者

### 3. 今後に向けて

2018年度から導入した英語習熟度測定テストの実施も4年が経過した。これまでの経験の蓄積とアクセスルームとの連携により、試験実施についても、毎年入学してくる配慮を必要とする学生についても、滞りなく対応できるようになっている。

しかしながら、実施後のテストスコアの返却が遅延するなど、学生へのフィードバックが十分には行われていない。また、実際に、英語教育界ではこうした習熟度テストの開発も進んでいることを踏まえて、テストの実施方法や内容を再検討することが現在の課題となっている。この課題解決のために、本学のこれまでのデータ分析とともに、他大学での実施状況についての情報収集を行い進めていくことにしている。

## IV. e-Learning プログラム関連

鈴木 幸平・森本 正太郎・池田 香代

学習時間を確保（授業外学習）する必要性から、e-Learning プログラムを本学でも英語教育の一環として導入している。しかしながら、本学学生の英語学習に対する動機づけは比較的低く、e-Learning 学習を学生の自主利用に任せていると、実効性が極めて低くなる傾向にある。そこで本学では、英語 IA/IB 及び英語 IIA/IIB（再履習クラスを含む）の成績評価 10%に e-Learning プログラムに設定された課題達成度を含めることで、学生の取り組み意欲の向上を図ってきた。加えて、Summer Activity などイベントを行うことで、英語 IA/IB、英語 IIA/IIB を履修していない学生にも e-Learning を自発的に利用してもらえるような工夫も行った。今年度は、2020 年度に導入した Word Mine と KICKOFF に加え、2020 年度に配信することができなかった Practical English Starter や、装いを新たにした Practical English 8 を導入した。今年度の新たな試みとして、双方向の英会話トレーニングプログラムである Virtual Live Training の運用を開始したことが挙げられる。結果として、多くの学生より肯定的な反応が得られ、今後より多くの学生の参加が期待される。さらに、今年度より、キャリアセンターの「キャリア開拓塾」と連携し、難関企業への就職を目指す学生を対象に、KICKOFF を用いた TOEIC®対策への取り組みもスタートした。なお、e-Learning の導入・設置経緯や過去の運用状況に関しては、『ACE Review 2018』『ACE Review 2020』において、詳しく紹介している。

### 1. 主な取り組み

本学の e-Learning は 2017 年度より ReallyEnglish 社（2021 年 4 月より「株式会社 Edulinx」に社名変更）のプログラム（提供プログラムの名称は引き続き"ReallyEnglish"を用いている）を利用している。2021 年度は、前年度に引き続き、日常、ビジネス、旅行など豊富なトピックでコミュニケーションの基礎を学習する Practical English Starter を英語 IA/IB の学生向けに課し、Practical English 8 を英語 IIA/IIB の学生に向けて導入した。これらの e-Learning プログラムの感想については e-Learning のアンケート調査の考察でも言及するが、履修者及び英語授業担当教員からともに肯定的な評価を得た。

表 1. 2021 年度 共通教育英語履修者の e-Learning 利用状況

		登録率		課題達成率		課題「0」の割合	
		(%)	比較 対前年度	(%)	比較 対前期 対前年度	(%)	比較 対前期 対前年度
1回生 英語IA/IB	前期	94.8		76.8		8.7	
	後期	97.1		72.5	-4.3	17.5	+8.8
	年間	96.0	+1.5	74.7	+5.4	13.1	-5.3
2回生 英語IIA/IIIB	前期	99.3		74.5		16.5	
	後期	99.6		71.0	-3.5	22.5	+6.0
	年間	99.5	-0.2	72.8	-3.3	19.5	+4.9
合計	前期	97.1		75.7		12.6	
	後期	98.4		71.8	-3.9	20.0	+7.4
	年間	97.7	0.7	73.7	+1.0	16.3	-0.2

※再履修クラスを除く

2021 年度の英語履修者の e-Learning 利用状況は表 1 の通りである。2021 年度では、e-Learning 課題実施数「0」、すなわち課題をまったく行っていない学生の割合は 16.3%に留まっている。特に 2021 年度前期は語学講義も多くがコロナ禍のため遠隔講義となっていたことを考えれば、高い達成率であると考えられる。e-Learning プログラムに設定された課題達成度が成績評価の 10%になることが、英語授業担当教員を通して、履修者に浸透してきたことが伺える。ただ、各学年に目をやると、1 年生の前期は課題未実施の学生が 8.7%である一方で、二年生の後期は課題未実施の学生が 22.5%となっており、e-Learning 課題に継続的に取り組ませることは今後の課題である。

アカウント登録数及び利用率の向上を目的として、本センターでは様々な取り組みを行ってきた。その一つに「e-Learning 学内相談会」が挙げられる。これは e-Learning 導入時より継続して実施しており、自習者に広く e-Learning を知ってもらうことに焦点を当てて開催している。2021 年度はコロナ禍のため、オンラインでの開催となったが、教育学部学校教育センターの「基礎ゼミ III」のスタンプシート課題の一つとしても利用された。

2021 年度は 5 月に 1 週間実施した。2021 年度の e-Learning 学内相談会実施状況は表 2 の通りである。

表 2. 2021 年度 e-Learning 学内相談会実施状況

日時	実施形式	担当者	参加者	質問内容
5/19~5/26	Zoom	森本	学校教育専攻 12名	スタンプシートについて
			その他 10名	e-Learning登録方法や・英語評価との関連について
合計			22名	

夏休み期間には Summer Activity を計画した。長期休み期間でも英語学習に取り組めるものとして、e-Learning 学習は最適である。TOEIC®受験を考えている、または受験する予定の学生に焦点を当て、TOEIC®対策教材として e-Learning に取り組めるよう、KICKOFF を活用と、単語・語彙学習としてのプログラム Word Mine を活用した取り組みを行った (図 1)。さらに、Summer Activity に取り組んだ学生への表彰制度を設けている。表彰要件は Summer Activity 独自の条件を設定しており、サッカー部の積極的な参加奨励の協力もあり 36 名と多数の達成者が出た。

図 1. Summer Activity Flier



図 2. 2021 年度 Summer Activity 達成者への表彰式



Summer Activity に加え、今年度より、春休み期間中も英語に触れてほしいという想いから、1月から3月の春休み期間中も Spring Activity を開催している。Spring Activity では、Summer Activity と評価項目の趣を変え、サインインの回数や、TOEIC®模擬試験のスコアアップ幅、e-Learning のテストスコア、さらに Virtual Live Training への参加状況まで総合的に評価することとした。加えて、取り組みやすさも意識してスタンプシート方式を採用した。期間中は定期的に学生の e-Learning 学習状況を事務が確認し、スタンプを押して学生にメールでフィードバックしている。新しい企画により、普段 Summer Activity に取り組んでいなかった多くの学生の参加を期待したい。

このように、ACE では、英語履修者や自習者に e-Learning の利用を広く推奨し、その結果、真摯に取り組んだ学生を表彰する制度を設けている。例年実施している「e-Learning 表彰式」では全学部生を対象に、指定した期間の e-Learning 学習成績を集計し、優秀者に表彰を行っている。表彰要件は 1) 対象期間内に 35 時間以上を学習していること、2) e-Learning の成績が良好なこと、としており、2021 年度は 3 月 10 日までの取り組み時間を対象としている。そのため、その結果は次号の『ACE Review』で報告したい。



図 3. 2021 年度 Spring Activity Flier とスタンプシート



何度か述べているように、2021 年度より、双方向英会話トレーニングプログラムである、Virtual Live Training の運用を開始した。このプログラムはオンラインで行われており、休み期間中も有効である他、コロナ禍でも安定して開催が可能である。Virtual Live Training では、4 人の学生に対して 1 人のネイティブスピーカーが 1 レッスン 50 分の英会話トレーニングを行うプログラムで、Zoom を用いて開催されている。今年度は合計 20 回の開講が企画されており、夏休み期間にはその内の 14 回が実施された。これまでに受講した学生に対する業者アンケート結果によると、91.4%の学生がレッスンの内容について、「大変良かった」もしくは「良かった」と回答。97.2%の学生が講師の説明は「非常に分かりやすかった」もしくは「分かりやすかった」と回答している（回答数 35）。さらに、自由記述式の回答では、「先生が優しく、しっかりとしたアドバイスや何回もわかりやすいように言い直してくれ、会話が進んで楽しかった」、「あっという間に 50 分が終わり、有意義な時間だった」のように肯定的な意見が多くみられた。

## 2. アンケート調査

e-Learning の利用を促進するためには、実際に使用している学生の意見を聞くことが重要である。本学の場合は共通教育英語履修者の e-Learning 登録率が 90%を超えているので、この英語履修者を対象に e-Learning に関する利用意識を探ることとした。加えて、学習を促す役割を担う教員側の意見・感想を聞くことも行った。

### 2.1 実施時期・対象

アンケート調査は、学生・教員ともに英語 IA/IB 及び英語 IIA/IIB の後期授業の第 15 週目に実施した。事前に学生向けアンケートとマークシートを授業担当教員へ配布し、授業内で実施してもらうよう依頼した。また、回収したアンケートは期限内に教務課または英語教

育センターに提出してもらう方法をとった。回収率などの詳細は表 3・表 4 の通りである。

表 3. 2021 年度教員向けアンケート調査の実施詳細

対象教員	20名
回収枚数	17枚
回収率	85%

表 4. 2021 年度 学生用アンケート調査の実施詳細

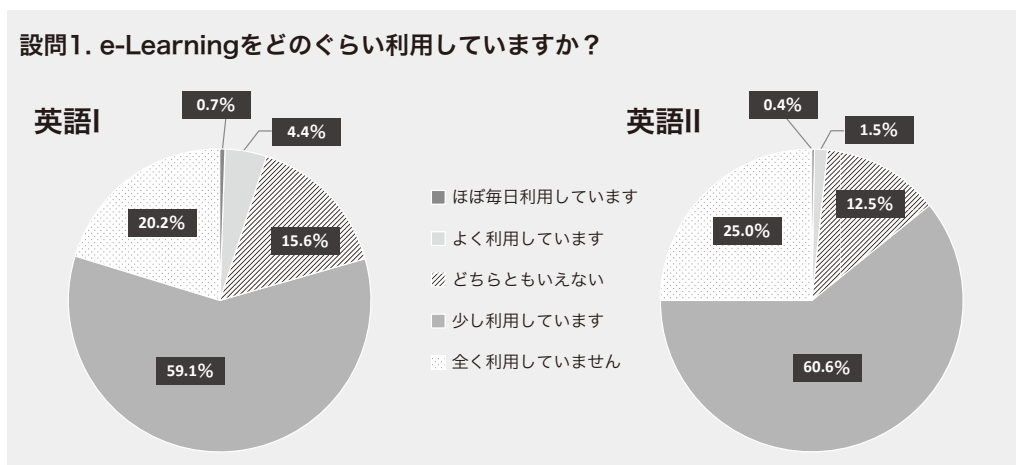
	英語I <sup>※</sup>	英語II <sup>※</sup>
配布枚数	606枚	668枚
回収枚数	430枚	520枚
回収率	71.0%	77.8%

※再履修クラスを含む

## 2.2 学生向けアンケート調査結果

アンケート内容は 6 つの項目を設定し、回答は 5 段階評価とした。各項目の内容と集計結果を以下にまとめた。「設問 1. e-Learning をどのくらい利用していますか？」に対する回答は図 4 の通りである。

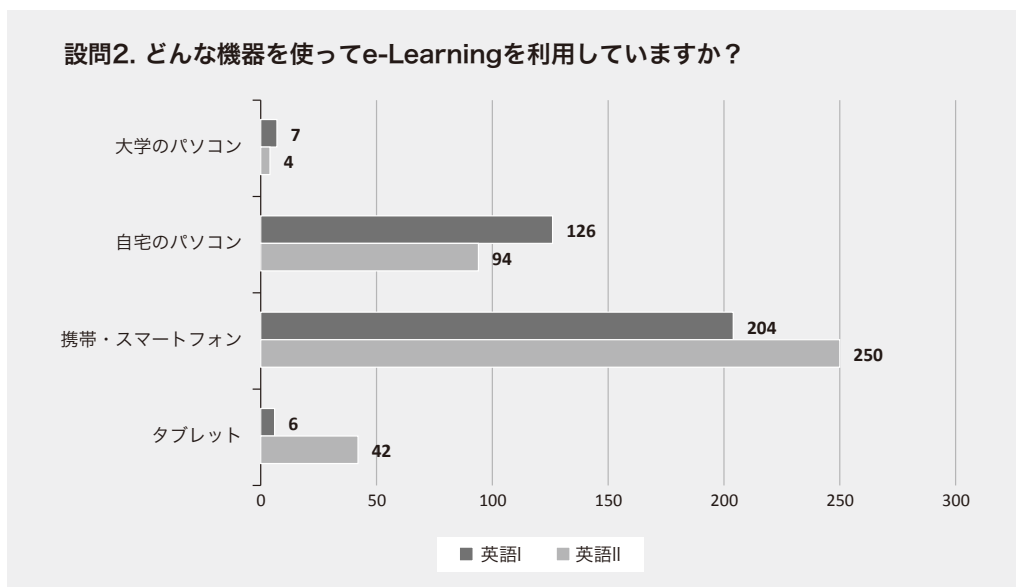
図 4. e-Learning の利用頻度



2021 年度の調査では、両学年で「少し利用しています」が半数を超え、共通して最も回答が多い項目となった。一方で、「全く利用していません」と回答した学生が英語 I、英語 II において、それぞれ 20.2%、25.0%となった。

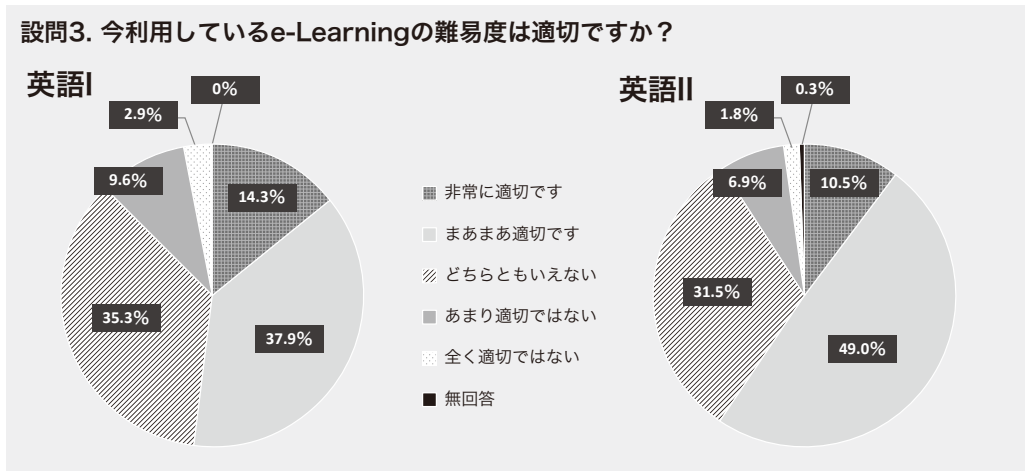
「設問 2. どんな機器を使って e-Learning を利用していますか?」については、英語 I 履修者、英語履修者ともに、大半の学生が携帯電話やスマートフォンを使うと答えている。これは、学生が通学などの空き時間に e-Learning に取り組んでいる可能性を示唆していると考えられる。現在のコロナ禍で、自宅のパソコン環境が整っている学生が増加しているためか、自宅のパソコンと答える学生も多かった。この反面、大学のパソコンと答える学生は少ないという結果が得られた。

図 5. e-Learning を利用するとき使用する機器



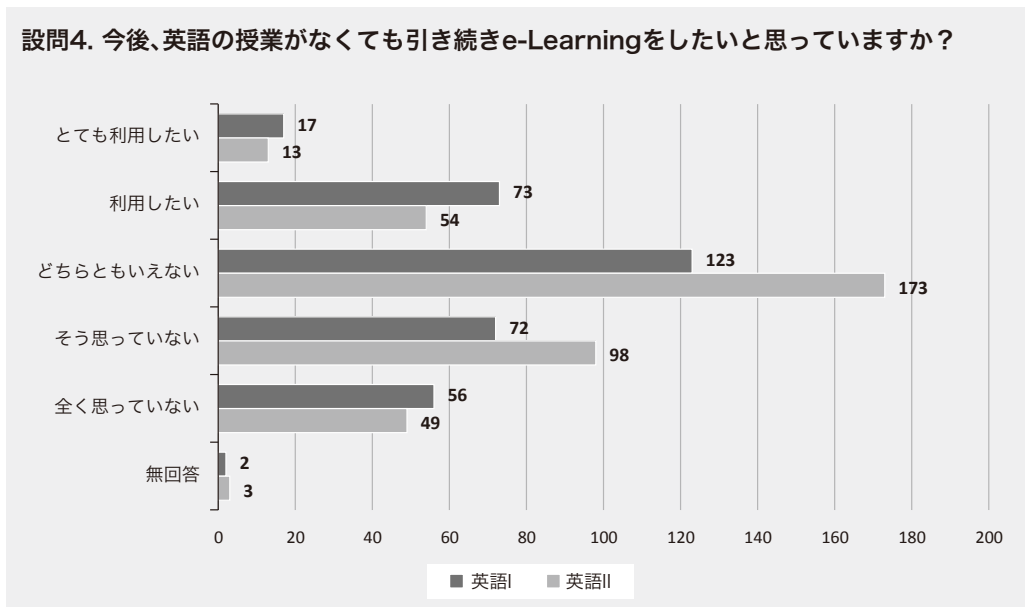
「設問 3. 今利用している e-Learning の難易度は適切ですか?」については、「まあまあ適切です」か「非常に適切です」と回答している学生が、英語 I 履修者、英語 II 履修者共に半数を超えており、学生は教材のレベルに関してある程度満足していることが伺える。この一方で、「適切ではない」と答えている層について、下記設問 5 の結果より、英語 I 履修者については、Practical English Starter がやや易しいと感じている学生が、英語 II 履修者については Practical English 8 がやや難しいと感じている学生がいることが考えられる。

図 6. e-Learning の難易度について



「設問 4. 今後、英語の授業がなくても引き続き e-Learning を利用したいと思っていますか？」については、「どちらともいえない」が最も多い結果となった。また、「とても利用したい」、「利用したい」と答えた学生の割合は、「そう思っていない」、「全く思っていない」と答えた学生の割合を下回っている。しかし、2019 年度の結果と比べると、アンケート回収数は減少しているにも関わらず、「とても利用したい」と答えている学生数は減少しておらず、e-Learning で英語をものにしたいと考えている学生が一定数存在することも事実である。

図 7. 今後の利用について



「設問 5. 全く利用していない理由は何ですか？」については、設問 1 で「全く利用していない」を選んだ学生を対象としている。結果として、英語 I 履修者、英語 II 履修者共に「時間がない」が半数以上を占めた。隙間時間でも利用しやすい教材や利用の仕方を考えるなど、対策が必要である。利用できる環境が整っていない学生については、できるだけ大学の設備の利用を勧めたい。また、英語 I 履修者の中に「簡単すぎて意味がない」と回答した学生が 14%、英語 II 履修者で「レベルが高すぎる」と回答した学生が 18%存在する。このような学生にどのようにアプローチするかも今後の課題としたい。

図 8. 全く利用していない理由

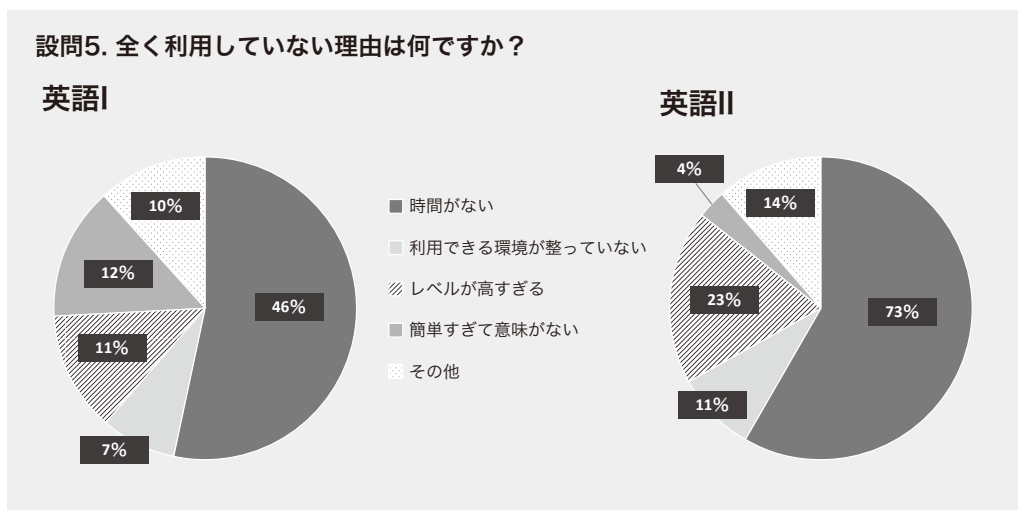


表 5. 設問 5 のその他を選んだ学生の自由記述

記述内容	出現回数 <sup>※</sup>	
	英語 I	英語 II
やる気の問題	8	6
期限忘れ	4	2
アプリの問題	1	3
利用方法が分からない	1	2

※似た記述をカウント

表 6. 他の e-Learning 利用に関する記述

6. あなたは、本学の英語 e-Learning 以外にほかの e-Learning を利用していますか？

	英語 I	英語 II
記述内容	Checklink スタディサプリ English 院試で活用できる英語のプログラム	LINGUAPORTA

### 2.3 教員向けアンケート調査結果

英語 I を担当する教員、英語 II を担当する教員がいるが、アンケート内容は共通の 3 項目とし、回答は自由記述式で行った。

教員へのアンケートより、e-Learning の難易度については、担当するクラスレベルに拠るところが大きいように感じる。一方、e-Learning で取れる最高の得点を取れるところまでしか e-Learning に取り組まない学生が多いとの意見が複数の教員から寄せられ、学生への動機付けが必要だと思われる。授業との関連性については、現時点で担当している講義と e-Learning が直接関連していると感じている教員はあまりいないようである。この一方で、今後何らかの形で関連させたいと考えている教員は多く、今後の工夫が待たれる。

次に、英語教育センター事務のサポートに関して、e-Learning の使い方がわからない学生への対応に関するコメントが見られた。英語教育センターのホームページに e-Learning 学習手順として、登録の方法が掲載されているが、これらの情報にアクセスしていない学生がいる可能性がある。今後 tani-WA などでの広報を行う必要があるかもしれない。また、e-Learning の内容サポートや表彰制度などを望む声もあるが、学生が取り組むユニットを英語教育センターが指定していないこと、ユニット数が非常に多いことから、内容サポートを行うことが難しい現状がある。表彰制度については、e-Learning 表彰式が毎年行われていることを周知して、学生への動機付けとしたい。英語教育センターのサポートについては多くの教員からとても役に立ったとの回答が得られており、コロナ禍の中、英語教育センタースタッフが e-Learning プログラムについては教員を適切にサポートしていたことが伺える。

## 3. 今後に向けて

本学が e-Learning を導入した 2017 年度より、本学では一貫して"ReallyEnglish"のプログラムを利用してきた。この間、e-Learning サービスを提供する企業が増えたこと、さらに本学学生のニーズにより合う e-Learning プログラムを探る必要があることから、今年度 10 月から 11 月にかけて、"Reallyenglish"、アルク社、EnglishCentral 社に各々の e-Learning プログラムの長所をプレゼンテーションするよう依頼した。結果として、学生が通学時などの隙間時間で利用しやすいか、教員が講義で使用しやすいか、Virtual Live Training のような英会話プログラムがあるかなどの面から、2022 年度以降も"ReallyEnglish"を e-Learning プログラムを採用することとなった。

2022 年度は、今年度好評だった Virtual Live Training の提供回数を増やすことで、学生により多くのオンライン英会話の機会を与えることで、学生が主体的に授業外学習取り組めるようにしたい。今後 ACE の e-Learning プログラムがより学習者の学習意欲に対応できるよう、一層努力していく。

## V. 英語検定試験

テレンス・ランカシャー

英検の取得級や TOEIC®スコアは学生自身の英語力を公的に証明できるものであり、留学や就職活動にも利用されている。ACE では英検・TOEIC®の申込受付や学内実施、試験対策のサポートを行っている。

### 1. 検定試験の実施

英検は 2020 年度、新型コロナウイルス感染拡大の状況に鑑みて、第 1 回と第 2 回については申込受付を中止したが、2021 度は年 3 回の試験申込受付を実施することができた。また、1 次試験の合格者については 2 次試験（面接）対策のサポートも行った。2021 年度の英検受験状況は表 1 の通りである。

表 1. 2021 年度英検の受験状況

	第1回検定試験※1			第2回検定試験			第3回検定試験		
	受験者数	一次合格	二次合格	受験者数	一次合格	二次合格	受験者数	一次合格	二次合格※2
準1級	—	—	—	1	—	—	1		
2級	—	—	—	2	1	1	2		
準2級	—	—	—	1	—	—	—	—	—
合計数	—	—	—	4	1	1	3		

※1 申し込み者なし

※2 結果：未確定

TOEIC® IP テストは 2020 年度第 1 回目が中止、後期はオンラインで実施したが、2021 年度はオンライン試験だけでなく、後期にマークシート試験を実施することができた。また、2021 年度はキャリア開拓塾からの要望により、実施回数も増やすこととなった。これまで ACE では、年 2 回 TOEIC® IP を実施してきたが、2021 年度は 5 月・7 月・1 月にオンライン試験、11 月にマークシート試験と、計 4 回実施した。1 月にオンライン試験を実施したのは、クラブ活動などを理由に 11 月のマークシート試験を受験できなかった学生がいたためである。

周知方法は HP や掲示板だけでなく、tani-WA も活用した。特にオンライン試験は受験者が指定されたテスト期間に、自宅で・好きな時間に受験することができるため、（※但し、スマートフォン・タブレットは除き、PC に限る）tani-WA を使って学生に案内し、受験を推奨した。また、TOEIC®を受験したことのない学生に向けたオンデマンド動画の配信も行った。表 2 に 2021 年度 TOEIC® IP の受験状況をまとめた。

表 2. 2021 年度 TOEIC®の受験状況

	試験形式	日程	教室	受験者数	平均点
第1回	オンライン	5/20～6/3	－	22	468.4
第2回	オンライン	7/9～7/21	－	30	416.8
第3回	マークシート	11/20	11-201	28	403.4
第4回	オンライン	1/6～1/18	－	18	465.6

## 2. 今後に向けて

2021 年度は新型コロナウイルス感染拡大にともない、さまざまな制約がある中で検定試験の実施及びそれらに関する学習機会の提供については例年とは異なる形をとることとなった。こうした経験からの知見にもとづいて、検定試験や対策講座の対面実施とオンライン実施の併用を引き続き継続する。e-Learning のより積極的な活用など、今後も社会情勢に応じて柔軟に対応し、学生の学習機会を確保する。



## VI. ACE 事務室

荒川亜希

ACE 事務室では、これまで「検定試験」、「教材貸出」、「e-Learning」を中心に学習支援を行ってきた。加えて、2021 年度はセンターの方針である「キャリア開拓塾との連携、学生の学修支援を積極的に進める」に注力して取り組んだ。「検定試験」については前の項目で詳細を述べたため、ここではそれ以外について報告する。

### 1. 学生への支援

2021 年は中学校教科書の改訂の年であったため、中学校（英語）の教科書や音声 CD、指導書を取り揃えることとした。主要である 3 種類「NEW CROWN」、「SUNSHINE」、「NEW HORIZON」を購入、教材室に配架した。これらの教材は教育実習や模擬授業の準備として学生が活用している。TOEIC®や英検といった検定対策の教材も毎年、新しいものを取り揃えている。また、業務のスピード化を図ることを目的とした新たな試みとして、教材管理方法にバーコード化を取り入れた。2021 年度の教材貸出状況は表 1 の通りである。※4 月~6 月の期間は管理方式を移行した関係でデータが取れていない。

表 1. 2020 年度教材貸出状況

		2022/01/31までのデータ	
		貸出者数 (名)	合計冊数 (冊)
2021年	7月	8	10
	8月	5	7
	9月	1	2
	10月	11	13
	11月	2	2
2022年	12月	41	51
	1月	44	48
	2月	-	-
	3月	-	-
合計		112 <sup>※1</sup>	133

※1 重複者あり

e-Learning に関するサポートもこれまで通り行っている。ログイン方法やパスワード再発行などの手順に関する質問から、アプリの不具合といった機器トラブルなど、学生からの質問は多岐に渡る。2021 年度も英語 IA/IB、英語 IIA/IIB の履修者は、e-Learning 課題達成度が成績評価の 10%に含まれているため、課題締め切り前には多くの学生から問い合わせが入ることとなった。新型コロナウイルス発生前と大きく異なるのは、事務室に来る学生が減り、学内メールで質問・相談するケースが増えたことである。これにより、事務員はメール対応に追われることとなったが、学生は困った時すぐにメールで状況を伝えることができるため、即座に対処できるのは大きなメリットでもある。実際、後期 12 月に e-Learning のアプリが強制終了してしまうトラブルが発生した際も、学生から複数の問い合わせが入ったため、すぐに業者に確認を取って対処方法を探ることができた。この件については最終的に HP・ポータル・tani-WA などを通して学生に現状のお知らせとトラブル対処法を周知したため、目立った混乱は見られなかった。その一方で、アプリの強制終了により、e-Learning 学習を諦めてしまった学生も見られたことから、このような情報配信をいかに効率よく効果的に行うか、今後検討していきたい。

キャリアセンターが起ち上げている「キャリア開拓塾」は 2 回生から計画的に準備し、学生が憧れる難関企業、有名企業にチャレンジできる実力を習得させることを目標としている。ACE ではキャリア塾生の TOEIC® スコアアップに対するサポートをキャリアセンターと連携して行っている。2021 年 4 月に実施した「キャリア開拓塾生の集い」では実施場所としてセミナー室を提供し、その際に事務から TOEIC®対策としての e-Learning の活用を案内することも行った (図 1)。

図 1. キャリア開拓塾生の集い



e-Learning については活用の案内だけでなく、実施状況も報告している。毎月、キャリア開拓塾生の e-Learning 受講時間・修了基準の達成率をキャリアセンターに報告し、学生の支援に役立ててもらっている。前の項目で触れている通り、2021 年度は TOEIC® IP テストの実施回数が増え、キャリア開拓塾生の多くが挑戦している。このような状況で、スコ

アアップに伸び悩む学生も見られるようになった。そこで、2021年6月にACE委員との面談の機会を設けた。面談では学生が実際、どのような英語学習法をしているかの聞き取りとそれに対するアドバイスが行われ、今後の英語学習法について、活かせる様なものとなった。以降、事務でもこういった学生からの相談を受け付けることとした。事務室で話を聞き取り、定期的に学習状況を確認するサポートを行っていることから、現在ではキャリアセンターから英語教育センターに学生が来る流れができつつある。

## 2. 今後に向けて

検定対策の教材については毎年、新しいものが出版されるので、今後も学生の要望に応じて豊富に取り揃えていく。e-Learning に関しては、これまで通りプログラムの案内やトラブル対応していきつつ、いかに効率良く効果的に学生へ情報配信できるかを検討する。キャリア開拓塾生へ連携も充実させたい。これからも英語学習の相談、検定試験・e-Learning に関する相談に対応していき、学生が継続して英語を学べる環境づくりをサポートする。

## VII. 英語入試作問

小山 敏子

本学で実施されている年間5回の学外入試のために、年度毎に英語科目担当教員で作問チームを結成し英語の入試問題を作成してきた。従来は旧英米語学科が中心となってこの作業を統括してきたが、2016年度の英語教育センター設置準備室設置以降、ACEの事業となっている。

ACEがこの事業を引き継ぐまで、作問作業についてはその年度の作問チームを構成する英語教員の裁量に委ねられてきた部分が多かった。そこでACEでは、本学のアドミッションポリシーを踏まえ、問題の構成や出題数などを公募推薦入試と一般入試とでそれぞれ統一化を実現してきた。また、2016年度には「出題ミス・採点ミス防止マニュアル」を制定、その後の改定では作問段階での校正作業をより慎重に行うことを明文化するなど、積極的に入試作問事業の改革を行ってきた。なお『ACE Review 2018』『ACE Review 2020』には、これまでの入試作問改革の経緯について記載している。

### 1. 現在の出題構成

前号で報告したように、2019年度より、大問Iの語彙・文法・語法問題の出題範囲の統一化を図るため、現行の「高等学校学習指導要領」で記載されている中から10項目にしぼり、出題範囲をより明確にした。また、これまで長文問題に含まれていた整序問題（英作文の力を確認するためのもの）を、本学のアドミッションポリシーを踏まえた日常会話の力を問うため、対話文の整序問題として独立させ、公募推薦入試、一般入試ともに大問の問題数を5つとした（表1）。

### 2. 今後に向けて

2022年度入試から、公募推薦入試（前期）にA日程、B日程が設定される。また、一般入試（中期）の選抜方法に変更がなされる。本学への志願者状況などを踏まえた入試事業の改革を念頭に、本学のアドミッションポリシーのもと、この作問作業を行っていく必要がある。また、高等学校学習指導要領改訂が2022年度から順次実施されることにともなう入試出題内容などについても考慮していく必要が考えられる。

表 1. 入試問題（英語）出題構成（現行）

<p>I. 単文穴埋め問題</p> <p>語彙・文法・語法に関する空所補充問題、出題範囲は、不定詞・関係代名詞・関係副詞・接続詞・助動詞・前置詞・動詞の時制や相・仮定法・句動詞（連語）・慣用表現</p>
<p>II. クローズテスト</p> <p>200 words程度の英文についての文脈理解と文法力を問う空所補充問題</p>
<p>III. 会話文</p> <p>日常生活場面で何気なく交わされる会話の流れを問う問題</p>
<p>IV. 長文読解</p> <p>BBCやCNN、JAPAN Times ONLINEなどのコラムから、600 words～700 words程度の内容を適切に読み解く力を問う問題</p>
<p>V. 対話文</p> <p>正確に英文を構成する力を問う対話の整序問題</p>

## VIII. 広報活動

今井 澄子

英語教育センター（ACE）が本学における英語教育の拠点としての役割を全うするためには、活動内容を適切に伝えるための広報活動が欠かせない。2021年度は、コロナ禍の影響を受けつつも、フライヤーの作成と掲示、ホームページの作成と更新、各種広報媒体への掲載、オープンキャンパス活動、ACE ロゴの作成など、多方面にわたる広報を行った。

### 1. フライヤー作成・掲示

図 1. 2021年度フライヤー（表）

ACE を紹介するフライヤーを新入生に配布した（図 1、A4 両面／表面カラー）。

また、一年を通して、各種案内用のフライヤーも作成した。例をあげると、英検、TOEIC®学内試験・オンライン試験、e-Learning 学内相談会、Summer Activity、ハロウィンイベント、クリスマスウィーク&イベント、Spring Activity などである。これらのフライヤーは、本学ホームページで案内するとともに、学内に掲示することで、学生への周知をはかった。



### 2. ホームページ・各種広報媒体への掲載

本学ホームページにおいて 11 コンテンツを運営し、英語情報の提供と ACE の宣伝に努めた（コンテンツは「ACE PV」「新着情報」「センター長メッセージ」「英語教育センターのご案内」「センター教員」「英語教育センターの役割」「利用案内」「e-Learning について」「資格・検定試験について」「ACE REVIEW（年次レポート）」「Blog SPEAK」）。

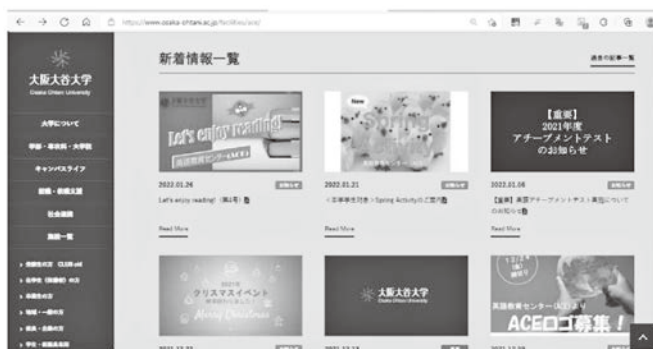


図 2. ホームページ

とくに「新着情報」では、ACEプログラムやイベント、講座についての案内やEASY)。報告を速やかに掲載し、学生の関心を高めるよう心がけた(図2)。

また、2021年度の新しい企画として「Let's enjoy reading!」を立ち上げた(図3)。本学教員がお勧めの英書を紹介していくという趣旨で、2021年6月に第1号を掲載し、2022年2月現在は、第4号まで公開済である。

図3. Let's enjoy reading!

**HOLES (Holes Series)**  
(by Louis Sachar)  
穴 (ルイス・サッカー 著)

あちこちに伏線が張られていて、何度読んでも面白い! 非常によくできた物語です。最後に近づくにつれてどんどん伏線が回収されていくのは圧巻です。300ページとかなり長い本ですが、易しい英語で、大きめの文字で書かれていますので、比較的サクサク読み進めることができます。日本語訳も出ていますので、難しい部分は日本語と比較して読み進めたり、先に日本語で読んで概略を理解してから挑戦したりするのも楽しいですよ!  
(推薦者: 教育学部 准教授 鈴木幸平)

英語教育センター(ACE)では、英語版と日本語版の両方を用意しています!

大阪大谷大学  
Osaka Ohtani University

図4. 大学案内

大阪大谷大学 英語教育センター ACE English Center

センター長メッセージ  
You can make your future better.  
あなたの未来を良くしましょう。

センター教員メッセージ  
Be part of an English learning community.  
英語学習コミュニティの一員として。

利用メッセージ  
教材選びや勉強方法がアドバイスもいただけます。英語で悩んだら、気軽に利用してみてください。

利用メッセージ  
Let's enjoy reading together!  
一緒に楽しみましょう。

利用メッセージ  
英語教育センターは、本学学生が主体的に英語を学ぶための場です。ACEは、英語の楽しさを伝える場です。英語の楽しさを伝える場です。英語の楽しさを伝える場です。

利用メッセージ  
英語教育センターは、本学学生が主体的に英語を学ぶための場です。ACEは、英語の楽しさを伝える場です。英語の楽しさを伝える場です。英語の楽しさを伝える場です。

紙媒体の広報としては、本学の『大学案内』に ACE の特集を組み、ACE の紹介、およびセンター長・センター特任講師・利用者のメッセージを掲載した（図4）。さらに、オープンキャンパス DM やリーフレット、学生ハンドブックなどにおいても ACE の広報に努めた。

### 3. オープンキャンパス

コロナ禍のため、2021年5月に予定されていた第1回オープンキャンパス（OC）は中止（延期）となり、6月に規模を縮小して開催された。当初、ACE は体験企画を準備していたが、感染拡大のため自粛することとなり、訪問者の集合場所で上映する動画を提供する形での参加となった。

2回目のオープンキャンパス以降は、動画にくわえ、体験企画の提供とキャンパスツアーの受け入れを行うことができた。表1のとおり、体験企画においては5つのコーナーを揃え、訪問者の関心にあわせて柔軟に運用することを心掛けた。なお、本来の企画時間は11:45～12:30であったが、第3回以降は、教室前を通る訪問者に案内するため、時間外にも待機した。

表1. 2021年度オープンキャンパス参加者数（体験企画）

	時間	訪問者数		主な実施内容
		()内は保護者の数		
第2回 (7/17)	11:45~12:30	3名	(1)	ACE体験企画 (1-104教室)
第3回 (7/18)	10:30~13:30	3名	(1)	5つの体験コーナーを企画 ①“Spelling Challenge”
第4回 (8/28)	11:00~12:50	1名	(1)	②“University Vocabulary”
第5回 (8/29)	11:00~12:50	4名	(2)	③“Daily Expressions”
第6回 (9/26)	11:00~12:50	4名	(0)	④“Really English” ⑤One Minute English
合計		15名	(5)	

キャンパスツアーは、第2回と第3回に実施され、志学館5階の英語教育センターの施設にも訪問者が訪れた（表2）。①の時間帯は体験企画との重複のため不在にせざるをえなかったが、セミナー室・English CaféにACEの動画を流し、訪問者に楽しんでもらえるよう努めた。②の時間帯には、予想を上回る訪問者に来ていただくことができた。第4回以降は、新型コロナの感染状況を考慮して中止となってしまう、残念であった。



表2. 2021年度オープンキャンパス参加者数（キャンパスツアー）

	時間	訪問者数
第2回（7/17）	①11:45~12:15 ②13:30~14:00	①不在 ②約10名×2組（保護者含む）
第3回（7/18）	①11:45~12:15 ②13:30~14:00	①不在 ②10名×2組・2名×1組・5名×2組 （保護者含む）

#### 4. その他の事業

例年、在学生オリエンテーション・新入生オリエンテーションにおいて、ACEの説明と動画の再生を行っている。2021年度においては、新型コロナウイルス対策のため、実施方法が学科ごとに異なっていた。そこで、各学科が組み込める範囲内でACE動画を再生するよう依頼した。

さらに、「ACEロゴ」の作成を進めていることも特筆すべき取り組みである。

作成にあたっては、図5のフライヤーにあるように、ACEをイメージする色・文字・デザインについて、学生・教職員に広くアイデアを募った。完成したロゴは、現在のロゴとの調整をはかりながら、2022年度から活用していく予定である。

図5. ACEロゴ募集の告知



## 5. 今後に向けて

2021年度は、2020年度に引き続きコロナ禍に見舞われた一年であった。広報活動において特に影響を受けたのはオープンキャンパスであり、突然の企画中止などの制限を伴うこととなった。相談ブースやスタンプポイントは設置することが叶わなかったが、体験企画においては、時勢に応じて適切に対応することができた。

また、より活発な広報活動を行うべく、新企画も複数立ち上げた。ホームページの「Let's enjoy reading!」シリーズでは、単なるプログラムの広報にとどまらず、英語を学ぶ楽しさを積極的に発信することができたのではないだろうか。2022年度からの使用開始に向けて作成している新しいACEロゴは、公募により作成していくというプロセスを取ったことで、大学全体のACEに対する関心と理解を深める効果もあったと考える。完成したロゴが活用できれば、ACEのイメージをより強く印象づけることにもなるであろう。

2022年度以降も、さらに活発な広報活動を行っていきたい。

## IX. ACE Program

Arnold F. Arao

The “new normal” has been a buzz phrase bantered about over the past few years. The initial impact of COVID-19 stopped the world in its tracks and the lingering and pervasive effects have forced people to re-think how they go about their daily lives. In particular, educators have had to re-evaluate lesson delivery. Some have used the technology available to replicate their lessons in a digital format, as online lectures or on demand videos. Others have taken the time to re-appraise the entire learning experience in the context of remote learning. They have looked for ways to facilitate learning and to capitalize on the accommodations afforded by Web 2.0 technology. The difference in the quality of learning between these two approaches is dramatic both in terms of academic achievement and student experience.

ACE recognized the importance of leveraging the accommodations of emerging technology several years ago, noting that forward thinking educators “can help learners use online engagement effectively, translating to greater offline advantages.” (ACE Review 2018, p4) Specifically, ACE has taken advantage of the ability to “communicate anytime and anywhere across a variety of platforms...[which] facilitates communication density and timely feedback.” (ibid., p5) ACE also predicted certain pitfalls inherent in dependence on such technology and has strived “to take full advantage of the benefits of technological advancements while helping learners develop resilience to the risks.” (ibid., p6). These risks emerged during the move to fully online learning over the past two years, “as many educators came to realize, it was important to address not only students’ academic needs, but their social and emotional well-being as well.” (ACE Review 2020, p21) Armed with this knowledge, ACE set out to support Osaka Ohtani University’s students develop their communicative abilities and provide more interaction that (despite the continuation of remote learning) allowed students to socialize with peers and faculty, interact meaningfully, and enjoy using English in a safe space (ibid. pp22-24).

### 1. ACE Lessons

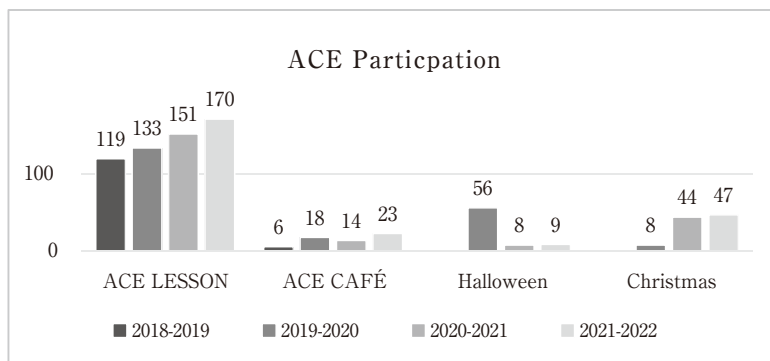
In 2021, ACE Lessons were still provided online with resources published on the school’s LMS, tani-WA. As in previous years, ACE Lessons focused on improving the four

Figure 1. ACE Activities in 2021



skills, reading, writing, listening and speaking with the goal of developing students' abilities to produce appropriate and meaningful responses. ACE Lessons also gave students the ability to choose particular activities allowing students' interests and motivation drive learning. In addition, ACE continued the tradition of holding Halloween and Winter Events. During the fall term, though students were welcomed back on campus and face-to-face class were resumed, there was still the possibility that another mandatory lockdown would be put into effect. As a result, ACE Lessons and events were designed to be flexible—able to be held fully online or in person. Though difficult to plan and prepare, the ability to move from one kind of delivery to the another allowed ACE to accommodate a larger number of participants, continuing the growth and development of the ACE community (see Figure 2).

Figure 2. Participation in ACE Activities 2018-Present



## 2. Focused Study

A key difference this year was opening up space for students to do intensive study—particular test preparation for the TOEIC and EIKEN. Time was allotted to support students pursuing these tests on Mondays, Tuesdays and Wednesdays. Online, students could message the instructor with questions, schedule lessons to practice particular skills, or submit work for evaluation and feedback. In person, students continued the habits they began on line and arranged for lessons with the instructor to practice skills, consult with the instructor regarding English questions and submit writing examples for feedback. This was well-received with seven students utilizing this resources throughout the entire academic year. Many of these students still continue learning habits (e.g. journal writing in English, blogging in English).

Figure 3. Open schedule. Areas in blue were open areas for students to consult with the instructor.

	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday
1限			授業	
2限			ACE LESSON	Scheduled
3限	ACE LESSON	授業		Student Meetings
4限	授業			授業
5限	授業			

## 3. Community Spaces

In addition to helping students develop into lifelong learning, we wanted to continue developing the ACE community. In fact, the expressed goal of 2019 was “developing and supporting and language learning community held together by the goal of capitalizing on the learning opportunities present in every interaction.” (ACE Review, 2020, p17) This community of language learners is ACE’s greatest strength. It is also somewhat unique to ACE. In many language spaces, interacting is largely linear—limited to students and instructors or staff. In some places, instructors work with small groups facilitating impromptu conversation lessons or activities. More often than not, students come to these language spaces with a particular objective—to have an opportunity to speak in English, to get answers to a particular English questions, or find a resource to help them in their studies. Although the students who visit ACE have these

goals, ACE has become much more than that. Beyond these personal goals, students come to ACE to meet with and make new friends. The ACE Café has lived up to its name and become a place to socialize with people sharing similar interests and place to discover new ideas. It is incredible to see the barriers of age, gender and faculty dissolve as students actively engage in conversation with each other. Catching up with old friends and welcoming new ones. At ACE, students work together on homework and projects, share observations and their favorite English movies and music, and make plans to spend time together on outings to various special events such as the recent Banksy exhibition. It is a place not only of learning, but of genuine care. Several years ago, Osaka Ohtani University's slogan was "Human and Heart." Thought not the best English, nor the most poetic, it does convey the importance of authentic relationships based on mutual respect and genuine care. Those who may have difficulty finding this on campus need only visit ACE where our students embody this spirit.

#### 4. Student Support

Recently, the University slogan has changed to "Because we care." continuing the idea of mutual support and connection. More now than in previous years, this has become essential for our students. The movement to online learning has been detrimental to students' learning experience. Without the opportunity for face to face interaction and socialization—the foundation of traditional education models—lessons become repetitive and context, especially for communicative activities, is lost. This is compounded by the fact that many of the teachers previously mentioned, have done little more than duplicate their lecture. Now, stripped of opportunities to interact directly with the instructor or classmates, these lessons are little more than vapid exercises in patience, often with follow up exercises tacked on as an afterthought to ensure student attendance rather than to inform learning. As harsh as this sounds, it is an accurate reflection of the knowledge gap between *teachers'* technological knowledge and pedagogy.

For this reason, since its inception, ACE has strived to better integrate technology into lessons. Students have access to iPads, digital blackboards, projectors and powerful computers to participate in online lessons, search information, and to create and share social media. At ACE, even remote learning has been beneficial for students. What was once just a means to convey information, remote learning has become a place in which learning can take place. For example, one lesson that focused on "homes", asked students to look around and describe what they see around them. This information was shared

and compared with each other. Curiosity led to follow up questions, which spurred impromptu introductions of favorite objects. Students created videos of their neighborhoods and engaged in Q&A often discovering “hidden secrets” and “favorite hangouts.” What was previously disparate—home and school—were brought together in a shared experience made possible by remote learning. This kinds of activities are particular important for students living alone or for students with social anxiety. In fact, with the move to online lessons in the previous year, it became clear that teachers needed to prioritize the care of students’ mental and emotional well-being.

Perhaps the most important contribution of ACE this year, was to attend to Osaka Ohtani University’s students’ mental and emotional health. The toll of COVID-19 on people’s mental and emotional health cannot be overstated—increased isolation, loss of social supports, increased anxiety, financial stress, loss of choices—particularly for university students, an already at-risk population. While lessons were delivered online, time was set aside on Thursday mornings for students to check in with the instructor. Often, conversations dealt with topics such as how they were coping and challenges that they were facing, what were their stresses, how to manage the overwhelming work load. Sometimes, conversation assumed a heavier timbre and students were listened to, empathized with, and encouraged. The goal was to help students feel heard and valued, to recognize their worries and concerns. Where necessary, students were also directed to seek appropriate help. As the year continued and despite the return to in person lessons, many students chose to continue even during school breaks. Students were grateful that amid the apparent chaos around them, someone made time to listen to and genuinely care for what they had to say.

## 5. Conclusion

Looking back on the past year, it is difficult to define what ACE has done without the context of COVID-19, which is probably true for the majority of institutions. However, what can be said is that the continued growth and success of ACE *despite* the detrimental effects of COVID-19 are due to two factors:

- the foresight of its members—recognize the emerging importance of technology in education, recognizing the importance of community and relationship to prioritize the genuine care of individuals;
- the cooperation of the students, faculty and staff of ACE who encourage and

support each other, and make ACE a place where people can come together.

Moving forward, it is important to build on these qualities, integrating the input of all members—faculty, staff and students—to develop and communicate a common vision of not only *what* ACE offers Osaka Ohtani University’s students, but also of *how* ACE fits within students’ learning goals and lifestyles.



## 執筆者一覧

Arnold F. Arao	英語教育センター 特任講師
荒川 亜希	英語教育センター 職員
池田 香代	人間社会学部 スポーツ健康学科 講師
今井 澄子	文学部 歴史文化学科 教授
小山 敏子	教育学部 教育学科 教授
鈴木 幸平	教育学部 教育学科 准教授
森本 正太郎	薬学部 薬学科 教授
Terence A. Lancashire	人間社会学部 人間社会学科 教授

(五十音順)

---

## ACE REVIEW 2021

2022 年（令和 4 年）3 月 31 日発行

編集発行 大阪大谷大学 英語教育センター（ACE）  
〒584-8540 大阪府富田林市錦織北 3 丁目 11-1  
TEL (0721)24-0596

印刷 協和印刷株式会社  
〒615-0052 京都市右京区西院清水町 13  
TEL (075)312-4010

---

A digital version of this publication is available for download at  
[www.osaka-ohtani.ac.jp/facilities/ace/review.html](http://www.osaka-ohtani.ac.jp/facilities/ace/review.html)



# IN THIS ISSUE

- ACE—Past, Present, and Future
- 教務関連
  - 共通教育英語関連科目
  - 英語習熟度測定テスト
- 学習支援
  - e-Learning プログラム関連
  - 英語検定試験
  - ACE 事務室
- その他の事業
  - 英語入試作問
  - 広報活動
  - ACE Program

Email: [eikyou-center@osaka-ohtani.ac.jp](mailto:eikyou-center@osaka-ohtani.ac.jp)

Tel: 0721-24-0596

HP: <https://www.osaka-ohtani.ac.jp/facilities/ace/>